

カウンセリングルーム サンプル

眠りを妨げる振動音。重いまぶたを上げられぬまま
手探りで携帯を取る。

『樹希^{いづき}くん、おはよう。朝早くからごめんね』

「あ……店長。おはようございます……」

今何時だろう。今日仕事だったんだっけ——と考え
て一気に目が覚めた。飛び起きて、携帯を耳から外して
時間を確認する。朝の八時。出勤までにまだ二時間も
あった。

『寝てたよね、ごめん』

「いえ……寝てはいましたけど、大丈夫です。何かあり
ましたか」

遅刻以外なら、客の予定がキャンセルになったか、変
更になったかのどちらかだろう。

ベッドから下りてカーテンを開ける。からりと晴れ
たい天気。

『あのさ、夜中に竹内くんから急に連絡がきてさ、なん
か福岡に住む親御さんの体調が悪くなったとかで、実
家に帰ったんだよね』

「え……そうなんですか」

樹希の仕事のパートナー。竹内とは組んでもう一年
になる。

『それで、今日からは別の人と組んでほしいんだ』

「え、竹内さんはもう戻ってこないってことですか」

店長の「今日から」という言い方が気になった。「しばらく」という言葉もつかなかった。

『うーん。うちに連絡が来た時点ではまだ本人も状況がわかってなかったみたいで、とにかく今すぐ実家に戻らないといけないって。電話の奥がガヤガヤしてたから、たぶん移動中に連絡をくれたんだと思う。状況がわかり次第また連絡をくれるとは言ってたけど、退職することになりそうとも言ってたから……』

店長の声には竹内の家族への心配がにじんでいた。客にはもちろん、従業員にも優しい。それが樹希の職場のいいところだった。

「わかりました。新しい方はもう決まってるんですか」
今、誰か空いている人はいただろうか。

樹希の仕事は、性的な不安を持つ客のカウンセリングを行うことだ。といっても、樹希はそのための道具になるにすぎない。実際にカウンセリングを行うのはパートナーであるカウンセラーの仕事で、樹希はただ、セックス指導をする際の、カウンセラーの相手役になるだけだ。

『うん。今日はその人が迎えに行くから。急なことで相性確認の時間が取れなくてごめんんだけど』

「いえ、大丈夫です」

本来ならパートナー関係を組む前に体の相性を確認する。感じるどころや苦手なところを把握した上で行

為を行うのだ。

しかし今回は急だったし、今日の予約も入っている。どうにもならないだろう。それに、職場に悪い人はいない。

『助かるよ。本当にごめんね。パートナーの名前は新津にいづさんだから』

樹希が気にしないでほしいと言うと、九時半にアパートの前に新津が迎えに行くと言って電話が切られた。

（新津さん……そんな人いたっけ？）

聞いたことのない名前だった。当然顔も思い浮かばない。

（どんな人なんだろう……）

穏やかな人だといい。できれば竹内のような。

五つ年上の竹内はいつでもこにこしていて、ダツチワイフ相手でも緊張してしまうような客に対してもしっかり笑ったりせず、「大丈夫ですよ。おちんちんをそっと握ってあげましょう」と声を掛けてあげられる人だった。

もちろん樹希に対しても優しく、仕事が終わると「今日は四つん這いが長くてごめんね。手首が痛くなっちゃったよね」とマッサージしてくれたたり、双方射精はしないという店内ルールを守っただけなのに「射精の直前で止めてごめんね」と労ってくれたりと、パートナーとしての愛情をたくさん注いでくれた。

（親御さん……大丈夫だといいいけど……）

恋愛感情は互いになかった。けれど信頼関係はしっかりと築けていて、仕事であっても触れてもらうと安心できた。だからこれからも、ずっとパートナーとしてやっていくものだと思っていた。それに、二人だけの秘密もあった。

（これからは新津さんと仕事をするのか……）
とりあえず、樹希にできることといえば相手に身を任せることだけだ。

初対面で遅れるわけにはいかない。少し早いですが、シャワーを浴びることにした。

「おはよう」

真顔。そして、でかい。

（俺より二十センチは高い……）

新津の年は三十代半ばだろうか。染めたこともなさそうな黒い短髪。氷のように冷たい目。閉ざされた薄い唇。まるでドラマに出てくるヤクザ役の人みたい。声も低くて、目が合つてもにこりもしない。愛想がないどころか、まるで心の底まで見透かされているような、人間性を評価されているかのような気分になった。

視線から逃げるように頭を下げる。

「おはようございます……迎え、ありがとうございます
す」

新津が顎を引いた。どうぞとも言わず、無言で助手席のドアを開ける。

「お邪魔します……」

新津の車は、誰でも知っている高級外車だった。座り心地のいいシートが樹希の体を支える。樹希がシートベルトに手を伸ばすと新津はドアを閉め、運転席に戻るとすぐに車を発進させた。

（む、無駄がない……）

顔つきのせいで、きびきびとした動作は圧迫感さえ抱かせる。

車が動き出しても挨拶はおろか雑談もなく、ラジオもオーディオもついていない車内は静かな走行音と、曲がる際のウインカーが響くだけだった。

「……何か？」

視線に気付いたのか、赤信号で車を止めた新津が樹希を見た。

（こ、こわい……）

「い、いえ……あの、これからよろしくお願いします」

「こちらこそ」

体温のない目が前を向いた。引き締まった頬。顎はしっかりと髭が剃られ、つるりとしている。息苦しそうなほどかっちりとしめられたネクタイ。手首に覗く高そうな丸い腕時計。

（絶対小銭とか持たないタイプだ……）

きつとズボンのポケットにはアイロンのかけられたハンカチがあつて、ジャケットの胸ポケットにはマネークリップで綴じられた札とカードが入っている。

車内に漂う高級感。遊びのない大人の男。

こんな人が、セックスに不安を抱いている人を安心

させることができるのだろうか。

（っていうか、俺、できる……？）

相手が新津だと思っただけでベニスが萎えてしまいうだ。客だっぴびっぴってしまっってカウンセリングどころではなくってしまっうのではないだろうか。

（この人のセックス……）

想像がつかない。そもそも、恋人をかわいがるタイプとは思えない。どちらかというと赤いひもで縛りつけ、電動系の玩具を性感帯に固定して放置し、快楽と苦痛にあえぐ姿をつまみにウイスキーやワインを飲んでいそうに見える。

（しかも相性確認の時間もないし……。マジで不安しかないんだけど……）

勃起できるだろうか。これまで演技なんて必要なかったけれど、これからはよがっているふりを求められるかもしれない。

ため息をつく、視線を感じた。しかし何も訊いてはこない。まるで責められているような、叱られているような、軽蔑されているような気分になる。

「……すみません」

返事はなかった。

窮屈さを感じる時間に耐え、駐車場にとまった車から逃げるように降りる。すでに出勤を済ませていたらしい新津は、荷物を持つこともなく裏口に向かった。

（この人とリラックスしたセックスなんて無理なんだけどっ！）

やはり他の人にしてほしいと店長に言ってみようか。けれどもし他にカウンセラーの空きがあったら、わざわざこんな冷たい人をパートナーになどしていないだろう。

（とりあえず今日だけ我慢……）

明日も予約は入っているが、今日の仕事終わりに店長に訴えればどうになるかもしれない。パートナー変更が無理なら、いつそのこと明日の予約を他のペアに割り振ってもらってもいい。ここで働く目的はお金ではないのだ。

「あ、おはよ！ ごめんね、樹希くん」

廊下の中ほどで店長に会った。どうやら迎えに出ようとしてくれていたらしい。慣れた笑顔にほっとする。

「いえ、それより竹内さんから連絡は」

「まだ。まあ、福岡で遠いしね。夜行バスならまだ着いてないだろうし。途中で新幹線に乗り換えてたとしても、病院に行ったりでしばらくは電話できないんじゃないかな」

「そっか、そうですね……」

「連絡がきたらすぐに伝えるよ。竹内くんも樹希くんと話したいだろうから」

「ありがとうございます」

樹希が店長と話している間に、新津は姿を消していた。おそらくもう、今日使う部屋に入っているのだろう。「新津さんとは初対面だったよね。どう？ 会ってみて」

「ほぼ何も話してないです……」

察して、と気持ちを込めて店長を見上げる。

店長ははは、と苦笑した。

「だよねえ……寡黙だよね」

「あの、新津さんにカウンセリングってできるんでしょうか」

どうか考え直してもらえないだろうか。それは樹希のためだけでなく、もちろん客のためでもある。

しかし店長は、苦笑をほほ笑みに変えた。目に力が戻る。

「ああ、それなら大丈夫。樹希くんも安心して身を任せ
て」

（マジで……？）

店長が言うのなら……しかし、乗り気になれるだろうか。男は興奮状態が一目でわかる。

「とりあえず、部屋に入って少しでも話してごらん。ぎりぎりまで体の確認も。今日のプランは『準備から』だから」

そうだった。準備から——洗浄から客に見せることだ。

「予約までもう少し時間があるから、苦手なことか言いたいことは先に伝えておいで」

そこまで言われれば、もう何も言えなかった。わがままだと思われないよう頭を下げて店長と別れ、部屋に向かう。

ノックをして入室すると、新津はソファに座ってい

た。樹希に気付くと腰を上げる。ピカピカの黒い靴が広い歩幅で近づいてきて、樹希の正面で止まった。

「時間がない。体を見せてくれ」

「は、はい……」

言い方ってものがあるだろう。竹内との相性確認の時は「恥ずかしいよね」とはにかみながら脱がせてくれて、樹希がもじもじすると「自分も」と言ってわざわざ脱いで一緒に裸になってくれたのに。

「どうした」

「え？」

「服を」

「あ……は、はい」

自分で脱げということか。

慌ててTシャツを脱ぎ、ベルトに手をかける。ぐずぐずしていると叱られそうで、手早く靴下を脱ぎ、下着ごと一気にズボンを下ろした。

無言。しかし、射るような視線を陰部に感じる。ズボンを足から引き抜き、全身をさらす。

「……あ、あの……」

「仮性包茎だな。起つだけでむけるか」

やっぱり竹内とは正反對だ。竹内ときは何も訊かず、「かわいいね」と触れて確かめてくれたのに。

「……手を使えばむけます」

「自慰をするときは？ 皮を使ってるか」

相手が新津でなければ、言葉責めだと思って興奮できたかもしれない。これではまるで尋問だ。

「……あまり自分でしないので」

「まったくしないわけじゃないだろう」

しない、と言いきってしまえば尋問が続きそうだ。

「その時は夢中なので、どんなふうに行っているかわかりません」

きっぱりと言い切る。態度が悪いと言われるかもしれないが、他に嘘が思い付かなかった。

「そうか。シフトは週三くらいだと聞いている。家でアナルはいじってるか」

「いえ、ここでされるだけです」

「乳首は？」

「しません」

そもそも、本当はオナニーをしない——できない。

「ペニスだけか。わかった」

もういい、と言わんばかりに新津がバスローブを差し出した。受け取るとくるりと背を向けられたので、そくさとしてそれを羽織る。

「……新津さんは」

「なんだ」

腰ひもを縛り、床に落とした服を拾う。

「体、見せてくれないんですか」

言いながらロッカーに向かうと、新津が樹希を振り返った。

「俺が仕事で露出するのはペニスだけだ」

「サイズ、とか」

自信がないのだろうか。

いや、おそらく「お前はただの穴だ」とでも思っているのだろう。

新津は返事をしなかった。樹希に背を向けたまま壁際まで歩き、柵から透明のデイルドを取り出す。

「このくらいだ」

新津が持っていたのは、用意された玩具の中で一番大きいLLサイズだった。

「え……」

「店長のところに行ってくる。時間になったら来る」

新津は返事も待たず、デイルドを樹希に渡して出ていった。

（ムリムリムリムリ……）

絶対に無理。サイズもそうだけれど、何より人間性が無理。

（絶対ローションをシリンジでぶっこんで指で適当に慣らして突っ込んで腰振って中出しして終わりじゃん！）

きつとフィクションのAVを本物だと勘違いしているタイプだ。絶対に怪我をする。そして自分はいくらも使えない物にならなくなる。

（今から……店長のところ、行く？）

時計を見る。予約の時間までは残り十分。

（店長が新津さんと代わってくれたりしないかな……）

立场上、店長が職場の誰とも体を繋げないことは知っている。でも緊急事態だろう。しかも今回のことは樹希が悪いわけではない。もちろん、竹内も悪くない。

新津が悪いかといえば――悪いわけではない。単純に相性の問題だ。きっと新津みたいな冷静でお堅い感じの人が好みという人もいるだろう。でも自分には合わない。無理。

（竹内さん……）

ところかすように甘かった。仕事中でも「かわいい」、「乳首気持ちいいね」、「おめめところになってる」と言葉でもたくさん愛撫をしてくれた。

（新津さんは……「なんだ、もう起ったのか」とか言いそう……いや起ちそうにないけど……）

ため息が止まらない。

射精しないとはいえ、感じている姿は客に見せなくてはならないのに。

「はぁ……」

時計を見る。残り五分。もう、どうにもできない。

諦めてソファに腰を下ろした時、ドアをノックされた。

「樹希くん」

顔を見せたのは店長だった。もしかして祈りが通じて交代になったのか。

「店長！」

「今、新津さんがお客様とこっちに向かってる。緊張してるかなと思って」

「あ……」

やはり交代にはならなかったか。

「不安そうだね」

「……はい」

素直に頷く。

「大丈夫だよ。身を任せて、思いっきり気持ちよくなつて」

「無理ですよ……」

「無理じゃないよ。大丈夫。竹内くん、いつも樹希くんはえっちでかわいいって言ってたよ」

「それは……」

竹内が優しくかったからだ。それにうまかった。テクニックだけじゃなく、気持ちの盛り上げ方も。

「さっき、竹内くんから電話が入ったよ。一人にしてみんねって伝えてほしいって言ってた。でも樹希くんなら誰とでも上手にできるよって」

きつと励ましの意味だったのだろう。でももう戻ってこないという宣言のように聞こえた。

「……樹希くん。竹内くんのところ、少し大変みたい。

詳しいことは後で話すけど、今日この時間に予約が入ってたことはちゃんと覚えてて、樹希くんのことを気にして間に合うように電話をくれたみたい」

「そうですか……」

「ごめんね、そろそろ行かないとお客様到着しちゃうから」

「……はい」

「でも、最後にこれだけ。自分の代わりに新津さんをつて、竹内くんが頼んだんだよ」

「え……」

信じられない気持ちで店長を見る。

「新津さんを選んだのは、竹内くん。だから、大丈夫」

店長は早口で言う、また後でねと言って足早に廊下を歩いていった。

（竹内さんが、新津さんを……）

いっただいどうして。

（……あれ、そういえばどうして店長は新津さんのことをさん付けで呼ぶんだろう……）

このスタッフのことは、誰であろうとくん付けなのに。

気になったけれど、ひとまず客の目につく前にと急いでドアを閉める。樹希がソファに戻って数秒後、ノックの音が響いた。外側からドアが開く。そして新津の声。
「どうぞ」

「お、お邪魔します……」

新津に続いて入ってきたのは、三十代半ばと思われるスーツ姿の男性だった。仕事をさぼってきたのだから——もちろんそんな疑問は顔には出さない。

「私のパートナーの樹希です」

新津の紹介に合わせ、客に向かって頭を下げる。

「よろしくお願いします」

「こちらこそ……その、よろしく。吾妻です」

吾妻はまばたきを繰り返しながら、視線をあちこちにさ迷わせた。セックスに自信がないのがよくわかる。たぶん、この年齢まで童貞のままきてしまったのだろう。年を取れば取るほど、『初めて』は失敗が怖くなる。

「まずは温かいものを飲みましょう。どうぞソファにお座りください」

聞こえてきた柔らかな声。しかし声は新津のものだった。信じられない気持ちでそちらを見る。

新津が吾妻にほほ笑みかけていた。そして吾妻も違和感なく、新津に笑みを返している。

「ありがとうございます。でもその……行為中に尿意を催したりしないでしょうか」

「勃起している間は排泄できません。緊張によってトイレが近くなることはありますが、リラクセスしてないと勃起もできませんから。それに初めてのセックスに焦りは禁物ですよ。気分を盛り上げる時間も含めて三時間はみておいてください。その間にトイレに行くタイミングは作れます」

新津が部屋の中にあるケトルからカップに湯を注いだ。どうやらほうじ茶らしい。香ばしい香りが漂ってくる。

ティバッグを揺らし、カップから抜く。それを二つ、新津はソファに運んできた。一つは吾妻、もう一つは吾妻と向かい合ってベッドに腰かける樹希に差し出される。

「え……」

俺にも？ と視線で問う。

新津はまばたきで頷くと、樹希の隣に座った。距離が近い。腕が触れている。感じる温もり。この人に体温があったとは。

「実は私と彼も、今日が初めてなんです」言いながら、新津が樹希の腰を抱いた。「緊張感には吾妻さんと同じです」

緊張しているなんて、嘘だ。けれど吾妻は安心したように、けれど不思議そうに首をかしげた。

「そうなんですか」

「彼のパートナーが急用で」

「そうでしたか……」

吾妻がカップに口をつけた。それを見て、新津が樹希の腰を撫でる。

「君も」

「あ、はい……いただきます」

熱いお茶。ふーふーと息を吹き掛けている間、新津の手はずっと樹希の腰にあった。

（なんか……さっきまでと違いすぎて……）

調子が狂う。本当に同一人物なのだろうか。

「吾妻さんの恋人も未経験なんでしたよね」

「はい。私がタチで彼がネコ……それはわかっていてキスまではしたんですが、相手も三十代でお互い失敗が怖いというか……したいと思い合っていることはわかってはいるんですが、なかなか一歩を踏み出せなくて」「そうでしたか。では初めてのときは一緒に温かいものを飲んでください。彼の好きな飲み物は？」

「ココアです。甘党なので。私はあまり好きじゃなくて、コーヒーの方がいいんですが」

樹希の腰を撫でていた手が、突然頭に触れた。大きな

手が髪をすくように撫でる。驚いて新津を見ると、すぐに視線がぶつかった。目は、別人のもののように優しい。「――でも、できればココアと一緒に飲んであげてください」新津の視線が吾妻に戻った。「セックス前のキスをした時、甘党の彼にコーヒーマの苦味を与えるより、好きな味を感じさせてあげましょう」

「……そうか。そうですね、そうします」

アパートに迎えにきたのはいったい誰だった？　そう思うくらい、すべてが違う。

「そしてココアを飲んでいる時もこうして腰を撫でたり、頭を撫でたりしてあげてください。それから、キスも」

新津の空いた手が樹希の頬に触れた。もしかしてこのために新津は何も飲まなかったのか。手を空けておくために。

（あ……これ……？）

すぐにキスをされるかと思ったのに、新津は頬を包んだまま至近距離から樹希を見つめ続けていた。

（や……）

長い。羞恥心が燃え上がる。まつげの一本一本、毛穴まで見られてしまいそう。

耐えきれず目を閉じた時、頬の手が顎に移った。すり、と撫でられたと思ったら、唇が重なる。

（あ……）

触れ合った唇は、最初少しも動かなかった。

（この人に……こんな柔らかいところがあつたん

だ……)

新津の唇がゆつくりと開き、下唇を食まれる。

(やばい……)

静かなふれあいがすぐくえっちだ。

ぞくぞくする。

持ったままのカップが熱い。

「ん……」

舌も絡めていないというのに、快感に喉が鳴った。

そっと新津の顔が離れていく。

「お茶を」

「え……」

「飲んで」

「あ……」

手が熱いと思っていたのに、お茶の存在を忘れていた。そんな不思議な感覚だった。

感じてしまったことをごまかすようにお茶を口に含む。けれどカップが唇に触れるだけで今のキスを思い出してしまう。

そんな樹希の腰を抱きながら、新津は説明を続けた。

「最初から舌を入れてはいけません。まずは唇に触れ合わせるだけのキスを。時間をかけてそれを数回繰り返し、それから舌での愛撫を始めます」

「は、はい……」

吾妻の顔は真っ赤になっていた。完全にあてられてしまっている。

「吾妻さんも、どうぞお飲みになってください。本日吾

妻さんが触れるのは人形ですが、本番だと思って指先まできちんと温めてくださいね」

頷いた吾妻が、一気にカップを傾けた。余裕がなくなっている。が、空気は悪くなかった。

ちらりと新津を盗み見る。温かい目で吾妻を見ていた。けれど視線に気付いたのか、すぐに樹希に目をやった。

「っ……」

細められた目。やはり冷たさは感じない。それどころか、求められていると錯覚するほどの熱があった。

無言のまま、今度は頬に触れるという予備動作もなく唇を重ねられた。

「ん……」

気持ちいい。自然と唇が開いてしまう。それに気付いたのか、ゆっくりと新津の舌が入ってきた。

「んう……ン……」

そつと触れる舌尖。強引さはない。樹希の様子を窺っているのがよくわかった。でもそれがもどかしい。もつと衝動的に求められてみたい。

（あ……やばい……起っちゃう……）

まだ愛撫らしい愛撫も受けていないのに。

舌を優しく吸われながら、太ももを撫でられた。それだけでペニスがぐんと顔を上げる。

「んっ……あ……」

唇が離れると、その間を唾液の糸が繋いでいた。それを辿るように新津の唇がもう一度樹希のそれに重なり、

ちゅっと吸われる。

「……彼の体温が上がったら、体を支えて浴室へ」

ぼうっとなっていた吾妻は、自分に話しかけられていると最初は気付いていなかった。すぐにハツとなり、勢いよく腰を上げる。

「慌てる必要はありません。浴室に向かう間も、歩きながらキスしてもいいです」

樹希の腰に回った腕に力が入った。導かれるまま立ち上がり、浴室に向かう。

店の浴室は、一般家庭のものよりかなり広い。

靴下を脱いだ新津は、吾妻にも脱ぐように言って樹希を洗い場のマットに座らせた。

「想定では、どのように彼の腸内洗浄を？」

新津の問いに吾妻が答える。

「たぶん、自分でするって言うと思います。その、恥ずかしいからって」

「そうですか。でも吾妻さんが洗浄ありのコースを選ばれたのは、洗浄もして差し上げたいからでしょう」

「はい。どんな彼も見たいんです」

「それがいいと思います。ここは数人で入れるように広く作られています、ご自宅のお風呂は二人で入れますか」

「まあ、寝転ぶのは無理ですが」

「パートナーの方が四つん這いになればじゅうぶんです。アダルトグッズのシリンジなどを使う方法もあります、今日ここではシャワーを使います」

新津が説明をしながらシャワーヘッドを外した。

「これもアダルトグッズのお店で売っています」と付け加えながら、アナル挿入用のパーツをシャワーホースの先に取り付ける。

「大事なものはお湯の温度と量です。挿入する前に、絶対に温度を確認してください。低すぎでは体を冷やしますが、熱すぎてもいけません。三十八度くらいがいいでしょう」

「わかりました」

「その時、安心させるために必ずパートナーにもお湯を触れさせてください」

新津が適温になったお湯を樹希の手にかけた。

「大丈夫？」

優しい問いかけに、思わずどもる。

「は、はい」

「それからアナル用のローションを挿入部分とアナルに塗ります。この時、アナルの中にも指で塗ってあげますが、まだ洗浄前ですから。こちらが気にしなくても相手がいやがりますし、指を石鹸でごしごし洗うのも興ざめです。なので指サックやコンドームをつけてから挿入します」

向けられた新津の視線が、四つん這いになるよう求めていた。二人に背を向けて尻を上げる。

新津がバスローブをめくった。そしてゴムをつけた指が、樹希のアナルに入ってくる。閉じていたそこを開かれる背徳感。そしてぬるぬるしたローションを体内

に塗り込められる快感。

「ンッ、あ……」

「指でアナルの開き具合を確認したら、お湯を入れま
す。家庭のお湯は出しておかないと温度が一定になら
ないこともあるので、不安でしたら温度の確認はアナ
ルの準備が終わってからでもかまいません」

もう一度、新津が樹希の手にお湯をかけた。

「一度お湯を止め、挿入はゆっくり。きちんと入ったこ
とを確認してからそっとお湯を出します。一度止める
のは、出しっぱなしで入れようとするローションが
流れてしまうからです」

「は、はい！」

「あ……ん……」

生温かいお湯がアナルに入ってくる。興奮とお湯で
体の中から体温が上がっていく。

「お湯はこのくらいで結構です。量が見えずに不安な
らシリンジで行ってください」

ホースが抜かれた。ぎゅっとアナルに力を入れる。

「湯を我慢して力が入っています。かわいいでしょう」

（かわ、いい……？）

「はい。こんな姿も見せてほしいです」

「大切に接すれば、必ず見せてもらえますよ」

見なくても、声でほぼ笑んでいるのがわかった。

ギャップが激しすぎる。

「立てるかな」

「あ、はい」

新津に肩を抱かれ、体を起こされた。支えられながら、今度はトイレに移動する。

樹希が便座に座ると、新津が正面に膝をついた。その後ろに吾妻が立つ。

「この時、きっとトイレから出ていつてほしいと言われると思います。ですが、見たいと思うのであれば残ります。ただ追い詰めないように、どうして自分がその姿を見たいと思うのかを言葉で伝えてあげてください」

「言葉で……」

吾妻を振り返っていた新津が体を正面に戻した。前屈みになって排泄欲に耐える樹希の頬をそっと撫でる。

「パートナーは、自分と繋がるために苦痛と羞恥に耐えてくれるんです。そのことへの感謝の気持ちと、どんな姿でも見たいと思えるほど愛していることを伝えてあげてください」

「それでも嫌がったら？」

「きつと、吾妻さんならパートナーの排泄姿を見ても興奮がさめることはないでしょう。汚い姿を見られたくないというのは、羞恥もありますがそれ以上に嫌われたくない、ひかれたくないという思いからです。ですから彼の手を取って」新津が樹希の手を取った。「ご自身のペニスに触れさせてあげてください」

「あ……」

手を股間に押し付けられた。新津のそれは、驚くほど硬くなっていた。

「大丈夫だ。安心して出してごらん」

勃起に触れさせられていた手を膝の上に戻された。けれど手のひらにはまだ新津の熱がじんじんと残っている。

（すご、い……）

すごく硬くて、熱くて、大きかった。

「大丈夫」

背中を撫でられると、自然と体から力が抜けていく。（竹内さんのときは、「恥ずかしがってる顔を見せて」だったのに……）

正反对すぎる。でも、新津の導き方も好き。

「安心して。大丈夫」

大丈夫——つい、新津の股間を見てしまう。スーツのズボンに隠されたそこは今も膨らんでいる。

「萎えないよ。むしろ興奮する」

視線に気付いた新津の、感情のこもった優しい言い方。

わかっている。これは樹希に言っているのではなく、吾妻にお手本として聞かせているだけだ。

けれど自分に言われているような気になってしまう。

「出ちゃう……」

「うん。待ってる」

キスを我慢するような表情の新津に、さらりと頬を撫でられた。

「あっ……」

汚い音。そしてにおい。

けれど水分の多い排泄は止まらない。

出している間、新津の右手は樹希の背中に、左手は頬にあてられ、まるで愛おしい相手を前にしているかのような目で見つめられ続けた。

「洗浄は非常に負担がかかります。それだけで、洗浄前にキスで高めた興奮もさめてしまうほどです。ですからベッドに移動したら、まずは労ってあげてください。介護をするような気持ちで飲み物を飲ませ、布団を掛けて抱きしめ、温めてあげます」

説明をしながら新津が樹希の横に寝転んだ。そっと抱きしめられるが、樹希の肌に触れるのはシャツの布。それを寂しいと思うってしまう。

一方、くつつけられた隣のベッドでは、吾妻が恋人に見たてたダッチワイフを抱きしめていた。

「キスをしたり、頭や体を撫でたりと、優しく愛撫をしてあげてください」

「はい」

「相手が落ち着いてきたら、乳首やペニスに触れていきます。でも、焦らしてもあげてください。触れるけれど、ただ触れるだけ、撫でるだけのようにいじり方を工夫して」

「触れるだけ、撫でるだけ……」

「それで熱が高まってきたら、いじってほしいと態度や声で教えてくれるはずです」

新津の手が樹希の乳首に触れた。けれど乳輪を撫で

た指は、ふいと腹の方についてしまう。

「あ……」

「洗浄で疲れて脱力していた体に力が入り始めたかどうかも見極めるポイントです」

淡々と説明をしながらも、新津の指は時折、樹希の乳頭を掠めては離れる、ということを繰り返していた。

「ン……」

「乳首、気持ちいい？」

「あ……」

ささやくように問われるいやらしい言葉。

「寒くないかな」

「はい……」

乳首を撫でていた手は、するりと背中に回ってしまった。ぎゅつと抱き寄せられるが、放置された乳首が切ない。

「や……あ、の……」

「うん？」

いじわるだ。けれど、竹内とは違った責め方に感じてしまう。

「ちく、び……」

「ちゃんと言えたね」

本当に、仕事前とはまるで別人だ。車の中や仕事の前もずっとこの性格だったら――。

「あっ、アッ！」

新津の指が乳頭の先端に触れた。けれどそれだけ。こねても、こすっても、つぶしてももらえない。

「やあ……」

ほしい。もっとしつかりといじってほしい。仕事のこ
となど関係なく、心から愛撫を求めている。

「あ……樹希くんの声が変わってきましたね」

「はい。もう疲れよりも快楽が前に出てきました。気持
ちが切り替わったことに気付いたと伝えるためにキス
をしてあげてもいいでしょう」

樹希の額に、新津が触れるだけのキスを落とす。顔は
離れていくが、視線は交わったまま。

こんなこと、竹内はしなかった。

じんと胸が熱くなる。

「あ……」

細められる目。まるで本当に新津に愛されているみ
たい。

けれど、新津は樹希の気持ちから逃げるように視線
を吾妻に向けた。

「この後に必要なのは観察です。相手がどこをどうさ
れるのが好きなのか、触れ方や力加減を変えながら見
極めていきます」

はつきりした口調——わかっている。仕事だ。すべて
仕事用に作られたものだ。求めるような目も、優しい言
葉も、いじわるな指先も。

「首筋を舐めたり吸ったりするのも効果的です。ただ、
今求められているのは乳首なので——」

新津の指が、樹希の右の乳頭をつまんだ。揉まれるよ
うにすると腹筋に力が入り、背中が反る。けれどつまん

だそれを持ち上げるように引っ張られると、今度はその刺激を強くしたくて背がシーツに沈み込む。

「ああっ……！」

「片方を確かめたら、今度はもう片方を。けれど感度の確認に集中してはいけません。いじる場所を変えるときは、焦らすべく極力高めてからにしてください」

新津が右の乳頭をくにくにと揉んだ。たまらない。次は左に移動されてしまうとわかっていても、そのまま続けてほしいと願ってしまう。

「乳輪もふっくらとしてみました。乳頭はパンパンです。こうなるとさらに敏感になるので、口での愛撫も楽しいです」

「アアッ！」

ちゅうつと吸われ、思わずよがる。気持ちいい。まるで感じる場所や方法をすべて知られているみたい。

それから新津は説明を添えながら樹希の腹に触れ、焦らすように手を繋いで視線を合わせてからキスをした。その後は腰骨を撫で、太もも……そしてペニスに触れるふりをして足の付け根へのキス。ほんの少し陰囊に触れて、足の指まで口に含むとうつぶせにさせて背中への無数のキス。唇は徐々に下へ向かい、尻の割れ目を開き、けれどアナルの直前までキスが進んだ時、仰向けに転がされた。

「あっ……」

二人の視線がペニスに向けられているのがわかった。

くく略く

「熱はないな」

「すみません……」

新津が樹希の額から手を下ろした。

「謝ることはない。ちゃんと来ただろう」

「それは……」

竹内から電話をもらったからだ。でなければ仮病を使っただけ、今頃家で転がっていた。

「もともと、今日は難しいかもしれないと考えていた」

「え……？」

「昨日、とてもよく頑張ったから。疲れただろう」

もう新津は仕事モードだった。立ったままぎゅっと抱きしめられる。

（新津さん……）

偽りの優しさ。

竹内は新津を優しい人だと言っていたけれど、これはカウンセリング用に作られた性格だ。

「おいで」

手を取られ、ベッドに導かれる。

樹希が座ると、新津も隣に腰を下ろした。

肩を抱かれ、目元を撫でられる。

「昨夜は眠れなかったか」

「……はい」

仕事モードの新津には、なぜか素直になれてしまう。

「じゃあ、今日は一緒に寝よう」

ベッドに上がり、横になる。新津は樹希に腕枕をする
と、体をすっぽりと抱え込んだ。

「おやすみ」

「でもあの、時間が――」

「寝不足は心の疲れた。昨日頑張ったから、疲れたんだ
ろう」

しないのだろうか。また新津が勃起をさせて、樹希が
自分で刺激して、萎えたらまた新津が――ということ
を繰り返さないのか。

「ほら、おやすみ。こうしているから」

新津が樹希の額に口づけをして、頭を撫でる。

ぬくもりと優しい声に、一気に眠気が襲ってきた。

「新津さん……」

「うん？」

伝えたいことがあるわけではなかった。首を振って
体を新津に預ける。

――寝不足だったはずなのに、すっきりとした目覚
めだった。自分がいつ眠ったのかさえわからない。

「新津さん……」

新津はまだ、樹希の頭を撫でていた。

「もう起きたのか」

「今……」

「まだ三十分しか経ってない」

三十分、ずっと頭を撫でてくれていたのか。退屈だっ
ただろうし、疲れただろうに。枕にしていた腕だってし

びれているだろう。

「すみません、本当に寝ちゃいました」

「寝るように言っただ」

頭を撫でる新津の手は止まらない。しかしもう眠気はなかった。

「もう起きました。ぐっすりと寝たみたいで」

いびきや寝言はなかっただろうか。急に心配になってくる。

「そうか。じゃあ喉が渴いただろう」

新津が体を起こす。体温が離れた。

「あ——」

「ん？」新津が樹希を振り返った。「ああ、寂しかったか」

樹希に覆いかぶさった新津が、くすぐるように樹希の耳や首元に唇をこすりつける。

「すぐに戻るよ」

「ンッ——」

少しかまってもらっただけで寂しさが消える。

しかしカップに湯を注ぐ新津の後ろ姿を見ているうちに、頭は冷静さを取り戻した。

（恋人プレイでカウンセリングってことか……）

一人ですることが苦手だから、相手とプレイしているふうにしてペニスをいじる耐性をつけさせるつもりなのだろう。

そして一人で射精までできるようになったら、また仕事のパートナーという関係に戻る。

「樹希？」

「あ——」

「どうした」

「いえ……」

体を起こし、差し出されたカップを受け取る。

「すみません」

「熱いよ。やけどに気を付けて」

いつものほうじ茶ではなかった。甘い香り。

「ココアだ。だがお湯で作ったから、甘味はきつくない」

「ありがとうございます」

カカオの香りが心を落ち着ける。

カップを傾ける樹希を、新津は隣に座って見守っていた。視線に耐えかね、口を開く。

「……あの、今日はどんなふうにするんですか」

「今日はこれで終わりでいい」

「え？」

「言っただろう？ 昨日頑張ったんだ。今日は昨日の頑張りを褒めるだけにしたかった」

そうだったのか。

（……じゃあ、もう帰るのか）

何のために来たのか、よくわからないな、と思う。

せっかく会えたのだから、もっと何か——と思った自分には焦る。

（本当に好きみたいじゃん……）

恋愛感情を認めるのは難しい。仕事を続けることを決めた以上、これからも体を繋げていく相手なのだ。

「だが、余裕があるなら少し話をしようか」

くく略くく

依頼されている同人作家のホームページ。

預かっているリンク集の内容を確認していると、ポर्टフォリオに漫画が載せられていた。リンクを飛ぶと、匿名掲示板に書かれていた話を漫画化したらしいものが並んでいる。

いろんな作家によって面白おかしく描かれた四コマ漫画を流し読みしていく。

すると、一つの記事が目についた。

(I市I中学校……ゲイの作り方……)

漫画なので、開けばすぐに内容が目に入った。

(……これ……！)

描かれていたのは中学校の教室。学ラン姿の男の子がクラスメイトに『お前、昨日オナニーしたんだろ！』と笑いかける。言われた男の子は顔を真っ赤に染め、『し、し、してないよ！』とあきらかに嘘とわかる表情で答えた。それを見たクラスメイトが『うわ、お前マジでしたんだろ！ 汚え！』と声を上げて笑う――。

スクロールする手が震えた。全身がじんじんと熱を持っている。心臓がバクバクと音を立てている。

次のコマは数年後に飛んでいた。みんなに笑われた男の子が、ゲイ専用出会い系アプリにプロフィールを載せている。

『同級生にオナニーをからかわれたことがきっかけで、そういう癖が芽生えました。僕のオナニーを見ながら笑ってくれる人募集』

これはいったい何なのか。

I市I中学校は、表記はイニシャルで伏せられているが、まさに樹希が出た学校だった。制服が学ランであることも共通している。

ここに描かれているような、出会い系を使ったことはないけれど――。

(……まさか……)

違うと思ったかった。けれどこれは確実に自分のことだ。それとも、場所は偶然で、同じ経験をしている人が世の中に何人もいるというのだろうか。

いや、やはり自分のことだ。あの時教室にいた誰かが掲示板に書き込んだのだ。

「うえっ」

猛烈な吐き気に襲われた。口を手で押さえ、トイレに駆け込む。

胃液だけになってもまだ吐いた。

鼻水をトイレットペーパーで拭き、勝手にこぼれてくる涙を手の甲で拭う。

「うう……」

なんで。どうして。

出会い系は使っていないのだから、続きの漫画はフィクションだ。けれどどうしてあんなふうに。

吐いても吐いても、何も出なくなっても気分はよく

ならなかった。それでも吐き疲れ、口をすすいで顔を洗
い、ベッドに倒れ込む。

(……なんで……)

あんなことを書いて、何が楽しいのだろう。

いじめと変わらないものを、どうして漫画にしたり
したのでろう。

無料掲載だった。しかし広告収入があるサイトのよ
うに思えた。誰かが、樹希の経験と創作が笑えて金にな
ると思ったのだ。

言われた方は忘れたいのに。

それにあの描き方では、あの場にいた誰もが樹希の
ことだとわかるだろう。そして樹希はあの出来事を
きっかけに、オナニーを笑われないという変態になっ
たと思うのだ。

(最悪……)

もう実家に近づくことすらできなくなってしまった。

涙がぼろぼろと落ちた。

自分が、何か悪いことをしたのか。

いじめだってしていない、調子にのった覚えもない。
ただタイミンク悪くあの場において、声を掛けられてし
まっただけ。からかうターゲットにされてしまっただ
け。

それだけでずっとオナニーすらできず、苦しんでき
た。

それをネタに稼がれ、読んだ人に笑われている――。
胃が痙攣するように痛んだ。

(もう消えちゃいたい……)

枕を抱き、唇を噛みながら涙を流す。

けれどどれほど泣いても心は少しも楽にはならなかった。

くく略くく

「樹希……樹希」

「あ、はあつ、あ、あ、新津、さんっ」

離れとはいえ、声を我慢しなければ、誰かに聞かれてしまうかもしれない。

しかし新津がカリ首ばかりをこするので、声を我慢することができない。

「ああつ、だめ、あつ」

「だめ、じゃないだろう？」

夕食を終えた後の、本日二度目の露天風呂。

新津は竹内に見せることを意識しているのか、熱い

手で樹希の体に触れた。

「んっ、きもちい、気持ちよくて声、だめっ」

「問題ない。出せばいい」

「だってっ……」

外だ。それに夕方で声が響く。

「俺しか聞いてない」

「でもっ」

「じゃあ、次は亀頭だ。口に含んで上顎と舌でつぶしてやると悦ぶところ」

「つく、あ、んうつ」

「手で撫でるだけでも随分よさそうだ」

新津が笑い、ぐるんぐるんと亀頭を手のひらでこねる。

「アアア——！」

もうイきたい。苦しい。

腰がへこへここと動き、新津の手にペニスをこすり付けようとする。しかし新津はペニスを掴んで拘束すると、亀頭だけを撫で続けた。

「あああ、あああ！　あああああ……！」

イきたい。もうイくことしか考えられない。

「樹希」

「あっ……」

「かわいい」

「あっ、あっ」

ずるい。こんな時にそんな言葉を言うなんて。

「かわいいよ、樹希」

「ああっ、あああっ！」

「樹希のオナニーを早く見たい」

「あ、あ、いく、イきたいっ」

「まだだめだ。樹希はこの後、俺と竹内が見ている前で自分でおちんちんをいじるんだよ」

「っ……」

「俺たちが見ている前で、一人で気持ちよくなるんだ」

「アアッ……」

今すぐイきたいのに。それに竹内にも見られると思

うと熱が高まる。

「――そろそろ来るか」

「あっ」

新津の手がペニスから離れた。苦しい。もっとしてほしい。イかせてほしい。

足をばたつかせると、新津が笑った。

「今いったら、オナニーでイけなくなるぞ」

「や……」

竹内にあきれられたくない。嘘を吐いたのかと思われたくない。

「ほら、上がるぞ。そろそろ竹内も来る頃だ」

もうそんな時間なのか。たしか風呂に入ったのは十九時半――もう一時間半も愛撫されていたのか。

新津に抱き上げてもらい、風呂から出る。

体を拭いて浴衣を着せられると、射精欲よりも緊張感の方が高まった。

「大丈夫だ。ちゃんとできる」

「……ん」

頭を撫でてくれる大きな手。先に部屋に戻ろうとする背中に抱きつくと、振り返ってキスをされた。

竹内は、それから十分ほどで部屋にやってきた。

「お邪魔します」

「お前の旅館だ」

「今部屋を使ってるのは部長たちでしょう」

竹内が笑い、樹希もぎくしゃくと笑みを返す。

「緊張してる？」

「……はい」

「じゃあ、お酒でも飲む？」

「すぐ酔いそう……」

「酔ったらどうなるんだ？」

「どうって訊かれても……」

いつも、アパートで一人で飲むだけだった。友達と飲むことも、一人で飲みに出掛けることもない。

「じゃあ、まあせっかくの再会だし飲むか」

新津が言い、冷蔵庫を開けた。缶ビールを三本抜く。

乾杯をして一口飲むと喉の渇きに気付き、ごくごく
と飲んだ。

「おい、大丈夫か」

「部長、樹希くんと飲んだことは？」

「ない」

「樹希くん、ほどほどにね？ お風呂上がりでしょ？」

「大丈夫です」

少し酔った方が、緊張感もほぐれる。酔いすぎるとイ
けなくなりそうだけれど、このくらいなら家でも飲んで
いる。

「何か食うか」

「少し、外に出てもよかったですね」

「いい居酒屋があるのか」

「はい。これ飲み終わったら行きますか」

「そうだな」

大好きな二人が話している。それを見ているだけで
幸せだった。

「へへへ」

「おい、もう酔ったのか」

「酔ってません」

「酔ってるだろう。オナニーできるのか」

「あ……」

忘れていたわけではない。

けれど二人の視線を浴び、ドキドキした。

「顔、真っ赤だよ」

「酔ってるのか恥ずかしがってるのかわからないな」

「酔ってないってば」

「じゃあ恥ずかしいのか」

「っ……」

視線をそらし、テーブルを見る。缶ビールなので、二人がどれほど飲んでいるのかはわからない。

「酔いつぶれる前にするか」

「あ……今？」

「イけなくなるぞ」

「……ん」

わざわざここまで連れてきてもらったのだ。旅費はすべて新津もちで、樹希は何も払っていない。

三人で隣室の、敷かれた布団の上に移動する。

「ほら」

「樹希くん。頑張って」

「あ……」

新津はいつもどおり樹希の背後に、竹内は樹希の正面に座った。

「えっちなところ、たっぷり見せてね」

「あ……あ……」

「樹希」

促され、膝を立てて足を開く。膝にかかった浴衣は新津が払って布団に落とした。

「下着、つけてたの？」

「だって……」

「着た時は起ってたんだ。浴衣を濡らすのが嫌だったんだろう」

「へえ、お風呂で部長とえっちなことしてたんだね」

「や、あ、その……」

「今は？ おちんちんどうなってるの？」

下着を脱げ、と言われている。けれど緊張して手が動かない。

「樹希」

新津に促され、意を決して下着を下ろした。

「かわいい……久しぶりだね、樹希くんのおちんちん」

「あ……や……」

「竹内にたっぷりかわいがられていたんだろう？」

視姦、オナニー練習本、9万字です！

どうぞよろしく願います！

カウンセリングルームサンプル

©goneone (っわんわん)

2024/10/15

メール:gooneonegooneone@gmail.com

pixiv:19591291

Twitter:@gooneone11

本書の無断複写・転載・複製を禁じます。

※この作品はフィクションです。

実在する人物、団体等とは一切関係ありません。